黄檗版大蔵経と彦根藩の

江戸時代前期の承応3年（1654）、日本黄檗宗の祖となる隠元隆琦（1592～1673）が中国・明から来日しました。多くの僧が隠元を歓迎したのは、明の仏教界屈指の高僧に大きな期待を寄せていたためと考えられています。

日本黄檗宗の開創は、既に幕府主導による寺院の整備が進んだ時期でした。にもかかわらず、教線拡大の速度は驚嘆すべきものです。

▲鉄眼版大蔵経のうち大般若経（光林寺蔵）

◀同　掃雲院の刊記部分

後の黄檗寺院の総数は1、000か寺を超えていました。

この黄檗宗の歴史の中で、社会に大きな影響を与えた事業の一つに、大蔵経の刊行が挙げられます。大蔵経とは、仏教聖典の総称で、仏教が広がった諸国で編纂されたものです。何千巻にものぼる経典を誤字脱字がないよう刊行するためには、信憑性の高いテキストと、膨大な費用および労力を必要とします。

日本での大蔵経刊行は意外にも遅く、江戸時代の慶安元年（1648）、天台僧の天海（？～1643）が、3代将軍徳川家光の援助を得て達成したものを最初とします（天海は事業途中で没）。しかし、この刊行部数は極めて少ないものでした。そこで、普及版の大蔵経刊行のために立ち上がったのが、黄檗僧の鉄眼道光（1630～82）だったのです。

寛文8年（1668）、鉄眼は、大蔵経刊行の計画を発表、翌9年に隠元から明版の大蔵経を授かり、黄檗山内に宝蔵院を建立して